

パラスフィアに生かされる 伝統の技と京都の自然

今年、文化の当たり年だ。琳派は光悦村が拓かれてから400年を迎える。また3月からは、京都国際現代芸術祭「パラスフィア」が約2カ月にわたって開催される。パラスフィアとは「別の、逆の、対抗的」という意味を持つ。英知や学問体系を意味するソフィアによる造語である。伝統文化の地、京都でなぜ現代芸術なのかとい

先人たちの尊い思いを 未来を担う若い人も忘れないで

私の作る人形は御所人形である。江戸時代に天皇をはじめ、公家や門跡寺院、大名家に愛された人形である。その多くは天皇に拝謁するため御所に参内した方に下賜され、日本各地に広がったことからその名がついたと言われている。

私の生まれ育った家は職住一体で、祖父も両親もずっと仕事場にいたので、私はいつも人形に囲まれていた。



池坊由紀
華道家元池坊次期家元

ながら今回は個々の単位ではないところが稀有な例だ。長い歴史を振り返ってみると、経済は常に文化と切り離せない関係にあり、そこから良い芸術作品や大きなうねりが生まれてきた。経済的保護のない中で苦悩の果てに絞り出されるような形で、作家が生命を削り取るかのような傑作が生まれたときもあった。

パラスフィアにおける今回の経済界の関わり方は、あらためて文化芸術が人を呼び、街を活性化させ、経済効果が大いなることを再確認させ、文化そのものがまさに経済であることを示唆し

ている。うれしいのは参加する作家の中で、笹本晃氏が西陣織や鍛冶の職人たちの体の動きを調査して、パフォーマンスとインスタレーション(空間展示)の表現に生かそうとしていることだ。彼女は、刃物鍛冶の現場を見に行き、インスタレーションを得たという。同じ道具でも、金属を熱して鍛造する過程で、職人の経験値により出来栄は異なる。ものづくりは、奥が深く美しい。いけばなはもとよりさまざまな文化芸術の素材となり、その造形や風情からインスピレーションを与えてきた自



●いけのぼう・ゆき
小野妹子を道祖として仰ぎ、室町時代にその理念を確立させた華道家元池坊の次期家元。「いのちをいかに」という池坊いけばなの心を通じた多彩な活動を展開。2013年にはハーバード大においてワークショップを、またニューヨーク国連本部において献花を行う。アイスランド共和国名誉領事。



伊東久重
有職御所人形司

最も難しいといわれる木彫法である。どんなに破損しても修復できる木彫法で作った人形は、何代にもわたりがわがいでつてもらえる。

ある日、工房に90歳を過ぎたお婆さんが訪ねて来られ、祖父の作った御所人形を修復してほしいとのこと。子どものころに母親から買ってもらった人形で、ずっと大切にしていた。先の大戦で家を強制疎開で立ち退かされたときも、この人形は離さず持つて出たという。そして、今度結婚する孫娘にあげたいので修復してほしいとのことであった。もちろん二つ返事でお受けし

たの言うまでもない。傷や汚れを取り、化粧直しをして人形は往時の姿によみがえった。受け取りに来られたお婆さんははじめご家族の笑顔に接し、あらためて祖父の教えを思い出した。先祖の人形を修復することの大切さを知ったのである。この人形がお婆さんの思い出とともにお孫さんと生き続けてくれることを願っている。

私は国内をはじめ海外でも個展をするが、いつも京都を題材にした人形が数多く出品する。京都の情景を題材にした作品は、海外でも非常に好評である。これは人形のみならず京都で作ら



●いとう・ひさしげ
1944年、京都市生まれ。12世伊東久重を継承後、伝統的な木彫法による御所人形の制作、修復を始める。佐川美術館、美術館「えき・KYOTO」、北村美術館、海峡ドラマシップなど国内外で展覧会を開催。今年3月に東京銀座和光ホールで個展を開催予定。主な収蔵先は、皇居、東宮御所、京都迎賓館など。同志社女子大非常勤講師。

人が爽やかに生きてゆくためには 「打たれ強さ」がなにより必要だ

昨年、春秋戦国時代から近現代まで、約3千年にわたる中国史のなかで、政治や文化などさまざまな分野で活躍した人々をとりあげた、「中国人物伝」(全4巻)を刊行した。主要な人物だけでも100名を超え、その生き方は各人各様であるが、生涯を通じて順風満帆という人物などほとんどなく、不遇や逆境を乗り越え、たくましく生きて



井波律子
中国文学者

典の編纂に専念する日々を送った。孔子はこうして長く続いた不遇の晩年を、決してめげることなく、不屈の精神力をもって明朗闊達に切り抜けた。その姿は「論語」にも生き生きと映し出されている。

ずっと時代が下り、三国志世界の英雄である曹操(155〜220)や劉備(161〜223)にしても、まさに波瀾万丈、激しい浮き沈みを繰り返した。一見、強力そのものの曹操も何度も予期せぬ大敗北を喫しているし、劉備にいたっては負けてばかりといってもいいくらいだ。しかし、彼らは敗

北の底から不死鳥のように蘇り、すばやく態勢を立て直して、最後まで戦い続けた。彼らは真に戦う者の突き抜けたような明るさと、けっして諦めない強靱な反発力によって、困難な状況を次々に突破していったのである。

もっとも、積極果敢に危機や不遇に立ち向かう生き方とはうらはらに、意に染まない状況から一歩身を引き、自前の道を模索する生き方もある。はるかに時代が下った北宋初期、北宋に滅ぼされた江南の国、呉越に生まれた詩人林逋(967〜1028)もその一人だ。林逋は亡国の出身者としてのこ



●いなみ・りつこ
富山県生まれ。京都大学大学院博士課程修了。国際日本文化研究センター教授を経て、同名著教授。専門は中国文学。2007年、森原武夫学芸賞受賞。著書に「中国の五大小説 上下」「論語入門」「一陽来復」「中国名書集 一日一言」「中国名詩集」「中国侠客列伝」「中国人物伝」(全4巻)、翻訳に「三国志演義」(全4巻)、「世説新語」(全5巻)など。

「和をもって尊しとする」 民族の街並みとは思えない光景

日本人は欧米人に比べ自我が弱い、とよく言われる。場の気配をおもんばかり、強い自己主張はなるべく控えようとする。周囲に合わせ、主体性を埋没させやすいきらいがあると、しばしば語られる。

ひところは「空気の読めない」人を



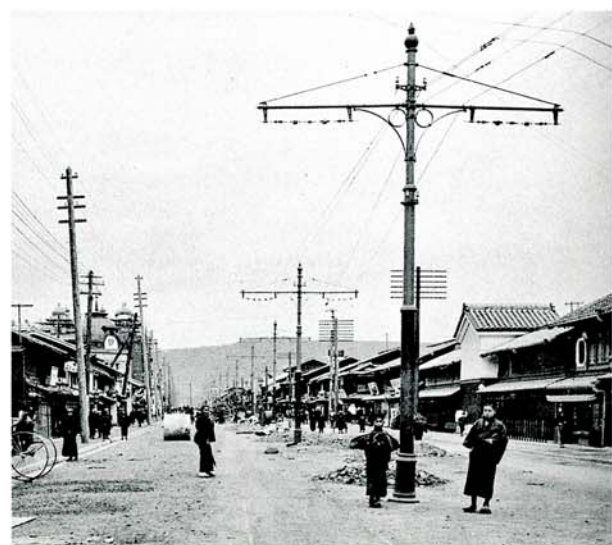
井上章一
国際日本文化研究センター教授

と、そうともいえない光景が目に入る。市中のメインストリートを挟む建築群に、全体的な調和があるとは言いがたい。むしろその逆で、それぞれの建物がでんでんばらばらに建っている。色も形も大きさも、まったく統一が取れていない。「和をもって尊しとする」民族の街並みとは思えない光景が、繰り広げられている。

ヨーロッパの古い街に、こういう乱れは見られない。彼の地では、たいていの建物が全体的な統一性を乱さないように整えられている。地権者や建築家の主体性が突出することは許されない。

京都は、日本の中だと、まだ街並みの調和を重んじる方だろう。そんな京都でも、ローマやパリと比べれば、ずっと乱雑に見える。建築に関する限り、自己主張が強いのは、間違いない日本の方である。

だが、明治大正期あたりの古写真を見眺めると、また話は違ってくる。四条通のような繁華街でも、その街並みは乱れていない。2階建ての木造家屋が軒を連ね、全体の調和が取れている様子を見て取れる。そう、かつての建物は隣近所に色も形も合わせていた。街並みの中で、自分を際立たせようと



●いのうえ・しろういち
1955年、京都市生まれ。京都大学大学院建築学専攻修士課程修了。80年同大人文学部研究助手。87年国際日本文化研究センター助教授を経て、2002年から現職。研究分野は建築、歴史、文化、風俗と幅広い。主な著書に「豊後屋の誕生」「美人論」「つくられた桂離宮神話」「伊勢神宮 魅惑の日本建築」など。近著に「現代の建築家」。